オリーブ山の説教　大患難期に関するたとえ話

イエスは答えて弟子たちに言われた。
「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが与えられています。しかし、彼らには与えられません。というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。
わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また悟ることもしないからです。」

（マタイ 13：11～13）

はじめに

6月から、みやま集会では、イエスが語られた「たとえ話」について学んでいます。テキストは、フルクテンバウム博士の「メシア的バイブル・スタディ」シリーズの中から、「たとえ話」に関係するものを選びました。

福音書の中には多くのたとえ話が記録されていますが、この学びでは、主要なふたつのたとえ話群を扱います。まず、マタイ 13 章、「奥義としての御国」に関するたとえ話群（九つ）、そしてマタイ 24 章と 25 章、大患難期に関するたとえ話群（6つ）です。

今、私たちは、神の国のプログラムから見ると、「奥義としての御国」の時代にいます。初臨のメシアが神の民であるイスラエル民族によって拒否された時から、この時代が始まりました。そして、この時代の終末は、「主の日」とも呼ばれる 7 年間の大患難期です。

大患難期を経て、次の時代（来るべき世）に移ります。それは、地上に建てられる「メシアの御国（メシアの王国、千年王国）」です。従って、「奥義としての御国」の時代は、大患難期の終了とともに終わります。

主要な二つのたとえ話群は、マタイ 13 章が今の時代を、マタイ 24 章と 25 章が今の時代の終末、大患難期を扱うものです。

たとえ話は、題材を当時の身近な生活シーンから取り上げているので、具体的な映像をイメージでき、何となくわかったような気になります。しかし、そこだけを読んで想像を働かせると、どのようにも解釈することができます。読み手によって十人十色の説明がでてくるのは、このためです。

イエスは、はっきりと言われました。イエスの弟子たちには「知ることが与えられている」。イエスは弟子たちに、そのたとえ話が何を意味するのか、教えてくださいました。また、そのようなイエスからの直接の解説がない場合は、旧約聖書でそれは何を意味しているのかを調べると、たとえ話を正しく理解することができます。

この学びの目的は、たとえ話を文脈に沿って読み、語られている意図を正確に把握すること、それによって、「奥義としての御国」の時代に生きる私たちが、今の時代をどう生きるべきか、信仰生活における平安と確信を受け取るためです。

「奥義としての御国」に関するたとえ話

	表題	たとえ話の聖書箇所	解説の聖書箇所
1	種蒔き	マタイ 13：3～9	マタイ 13：18～23 マルコ 4：13
2	種は自分で育つ	マルコ 4：26～29	
3	毒麦	マタイ 13：24～30	マタイ 13：36～43
4	からし種	マタイ 13：31～32	参考　マタイ 13：4、19 黙 18：2
5	パン種	マタイ 13：33	参考　マタイ 16：6～12
6	隠された宝	マタイ 13：44	参考　申 7：6
7	真珠	マタイ 13：45～46	参考　ダニ 7：2～3 黙 17：15
8	地引網	マタイ 13：47～50	参考　マタイ 25：31～46
9	家の主人	マタイ 13：51～52	

オリーブ山での説教　大患難期に関するたとえ話

対象	表題	たとえ話の聖書箇所	内容
ユダヤ人	いちじくの木 （マタイ 24:9「あなたがた」→31「選びの民」、9 節から 31 節で語った内容の総括）	マタイ 24：32～35 マルコ 13：28～31 ルカ 21：29～33	メシア再臨の時期を確実に予想できる事件＝荒らす忌むべきものが据えられる（その日から 1260 日）

話題転換　対象は教会　マタイ 24：36～42　（大患難期に入る前に携挙）

異邦人	① 門番	マルコ 13：33～37	大患難期において再臨を待つ異邦人信者に対する励まし。 目をさましていること、備えをしていること、主の働きをしていることを勧める。 大患難期における異邦人についての、信者と不信者との区別。
	② 家の主人	マタイ 24：43～44	
	③ 忠実なしもべと悪いしもべ	マタイ 24：45～51	
	④ 花婿を出迎える十人の娘	マタイ 25：1～13	
	⑤ 主人の財産を預かるしもべ	マタイ 25：14～30	

⇩

大患難期末における再臨と異邦人の裁き　マタイ 25：31～46

大患難期に関するたとえ話「いちじくの木」と　その後の5つのたとえ話

1. 最初のたとえ話「いちじくの木」（マタイ24：32～35、マルコ13：28～32、ルカ21：29～33）
2. このたとえ話のポイント
   (1) いちじく、そして他の果樹の木々が芽吹いて、葉が出る、花が咲く。これは春が来たしるしである。それらを見たら、夏は近いとわかる。
   (2) 同じように、イエスが語ったことがら（マタイ 24：9～29）を見たら、イエスは戸口まで近づいている、とわかる。
   (3) イエスが近づいている、それは携挙か、再臨か？　ルカ 21：31 では、「神の国は近い」と記されている。神の国、すなわちメシアの王国は、携挙ではなく、再臨によってもたらされる。よって、このたとえ話のテーマは、再臨。
   (4) イエスが語ったことがらの中で、再臨までの期間を明確に設定できる出来事は、マタイ 24：15、「荒らす憎むべきものが、聖なる所に立つ」事件。この日から、再臨まで3年半、1260日。
3. このたとえ話が語られている対象者
   (1) 「荒らす憎むべきものが、聖なる所に立つ」事件は、サタンと反キリストがいよいよユダヤ人抹殺の最後の戦いに着手したしるしである。
   (2) このたとえ話は、大患難期の後半期に民族史上かつてない苦しみを受けるイスラエルの人々に対するメッセージである。
   (3) ルカ 21：28「贖いが近づいた」とは、民族的新生が近づいたということ。32節の「この世代」とはイエスを拒否してきたイスラエルの世代を指す。
   (4) このたとえ話の対象者は、イスラエル、ユダヤ人である。
4. このたとえ話は、大患難期におけるイスラエル（マタイ 24：9～31）の総括である。
5. このたとえ話のあと、イエスは話題を変えて、携挙について教える（マタイ 24：36～42、ルカ 21：34～36）
   (1) 携挙の対象は、教会の信者。
   (2) 携挙の時期は、大患難期に入る前（38節、日常生活）。時期を特定することはできない（36節）
6. そして次に、大患難期における異邦人を対象として、5つのたとえ話が語られる（マタイ 24：43～25：30、マルコ 13：33～37）。
   (1) 再臨を待つ異邦人信者には3つの勧め、「目をさましていること、備えをしていること、主の働きをしていること」
   (2) 大患難期における異邦人は、信者と不信者とに区別される。悪いしもべ（24：48）、油を持たない愚かな5人の娘（25：3）、悪い怠け者のしもべ（25：26）は、すべて不信者。
7. 5つのたとえ話に続いて、異邦人の裁きが預言される（マタイ 25：31～46）。
   (1) 5つのたとえ話で語られた「信者と不信者との区別」が実行される。
   (2) 5つのたとえ話は、異邦人の裁きにつながる、ひとかたまりの教えである。